

「サタンと罪をよく知ろう」

皆さん、こんにちは。

きょうは、「サタンと罪をよく知ろう」という題目で、説教をいたします。

はじめに、聖書を拝読します。

見よ、主の手が短くて、救い得ないのではない。その耳が鈍くて聞き得ないのでもない。ただ、あなたがたの不義があなたがたと、あなたがたの神との間を隔てたのだ。またあなたがたの罪が主の顔をおおったために、お聞きにならないのだ。

（『旧約聖書』イザヤ書 59 章 1～2 節）

幸せと不幸

きょうのテーマは「サタンと罪」です。非常に重たいテーマですが、あえてそのような悪の内容を共に学んでみたいと思います。なぜそのことを学ぶことが大切なのかと言えば、不幸の原因を知って、良くなっていくために必要だからです。

皆さん、この世の中が幸せだと思いますか？ それとも不幸だと思いますか？ 難しい問い掛けだと思います。幸せな世の中だと言い切ることもできないけれど、幸せな要素がない訳ではないですね。

『原理講論』の冒頭に、

人間は、何人といえども、不幸を退けて幸福を追い求め、それを得ようともがいている。個人のささいな出来事から、歴史を左右する重大な問題に至るまで、すべては結局のところ、等しく、幸福になろうとする生の表現にほかならないのである。

（『原理講論』総序）

と、あるように、人は皆幸せな状態を求めています。それなのに、なぜか不幸だと感じる状況に陥ってしまうことがあるというのです。

個人のレベルでは、良心に従って誰かのために頑張ったら気持ちが良いのに、苦手な人には距離を取ったり傷つけてしまったりしてしまいますよね。

家庭では、大切な親、奥さん、旦那さん、兄弟、子供だと思っているのに、相手の態度にイライラしたり喧嘩したりしてしまう時もありますね。

学校や会社では、友達や仲間と仲良くやっていきたいのに、つい自分なりに人を評価してしまったり、悪口を言ってしまう時もあるでしょう。

国や世界では、皆が平和を言葉にして目指していると言いながら、戦争や紛争が起こって大切な人や生活環境を失う不幸が生み出されています。

このように、矛盾した状態にあるのが、私達人間と人間社会です。その矛盾を生み出している原因が、サタンであり罪なのです。だから、サタンや罪についてしっかりと知って、克服していくことがとても大切です。

悪とは何か

それでは、悪とは、一体何なのでしょう？

漠然と良くないものとして認識している「悪」という存在を、明確にしてみたいと思います。真のお父様は、悪について次のように教えていらっしゃいます。

悪とは何でしょうか。悪とは、この世界への利己心の顕現です。神の利他的な与える原理は、神ならぬ利己的な奪う原理へとゆがめられてしまったのです。仕えるよりも仕えられることを望む邪悪な立場が、その時から打ち立てられたのです。悪の根源はサタンです。彼は神に仕えるべき立場にいました。しかし、彼は、もう一つの神のような態度をとり、人間を自分自身の利益のために従属させたのです。

(『祝福家庭と理想天国(Ⅱ)』p.268「人間に対する神の希望」)

私達の中の利己心、つまり自分のために他を利用しようとする心、自己中心の思いをもって行為をなすことが悪であると、お父様は教えてくださっています。

そしてそれは、サタンを中心としてはじまっているということです。

成和学生の皆さんも、家庭や学校などで、自己中心の思いを感じたり、その思いに負けて行動してしまったりすることがあるかもしれません。

たとえば、本当は自分の失敗が原因なのに、間違っって兄弟や友達が怒られてしまっているような状況で、皆さんはどうするのでしょうか？「私が原因です」とはっきりと言って、兄弟や友達を守るのでしょうか？それとも、黙っていれば分からないので、そのまま自分を守ってやり過ごすのでしょうか？そのような自己中心の思いが湧いてくることがあると思います。そして、自分はなんて醜い存在なのだと、感じてしまうこともあるかもしれません。

しかし、その自己中心の思いが、元から自分に備わっていた存在なのか、ということが非常に大切な問題です。それはあたかもはじめから自分の中にあったかのように湧いてくるので、それが自分の本心だと思ってしまうかもしれません。

しかし、それは間違いです。私達人間の中に、元々悪の思いは存在しませんでした。それは、サタンの目的を指向している心なのです。

ですから、自己中心の思いが湧いてくるとき、「なんてダメな自分なんだろう」とマイナスな方向に行ってしまうのではなく、「これは私の本当の思いではない！」と、自分の中の悪に傾く思いを自分から切り離して捉えることが、まず大切な第一歩です。

サタンとなった天使長

それでは、サタンとは何でしょうか？

統一原理で学ぶように、サタンの正体は天使長ルーシエルでした。そして、ルーシエルと一緒に神様を裏切って去って行ってしまった天使達、そして自己中心的な生き方をして霊界に行き、地上に悪行をさせるようになった悪霊人などを総称して悪神と呼びます。

先程もお話ししたように、このような悪の勢力、サタンに私達は霊的に働きかけられ続ける中で、自己中心の思いを抱き、そのような行動をしてしまっているのです。

ルーシエル天使長がどのようにしてサタンになったかを知ること、悪の成り立ちとからくりを知ることができます。ルーシエルがどのような罪を犯してサタンとなったのか、み言から学んでみましょう。

もともとサタンはどんな存在なのでしょうか。悪魔とはどんな存在かといえ、神様の僕です。しかしこの僕の者が、主人の娘を強姦したのです。これが墮落です。聖書に出てくるその墮落とは何かといえ、エバが善悪の実を取って食べたのが墮落だと言いますが、善悪の実は果物ではありません。僕の者が主人の娘を強姦したことです。将来、代を継ぐ息子、娘を生み育て、神様の理想を成そうとしていたのに、僕として造った天使長という者が、主人の娘を強姦したのが人類の墮落の起源になりました。この世にそんなことがあってもいいのでしょうか。天地がそのようになったのです。複雑にもつれた内容を、皆さんは原理を聞けば大体分かるはずですよ。

（『罪と蕩滅復帰』p.63、第二章 罪、人間墮落の内的意味）

このように、ルーシエルは神様の娘・エバと男女の関係を結ぶことで、神様からエバを奪い去り、自分のものにしました。聖書に書かれている「善悪を知る木の実を取って食べた」というのは、男女の関係を結び淫行を犯したということなのです。

ルーシエルはさらに、エバを通して神様の息子・アダムまで墮落させました。そうして神様を裏切り、自分が神のように振る舞うサタンとなったのです。

そんなサタンとなったルーシエルは、神様に対してどのような態度を取っていたのか、お父様が次のように語られたことがあります。

サタンは何を主張するのでしょうか。「あなたは神様ですが、私は悪魔になりました。それを認めます。私は悪魔です。それではあなたの原理を見れば、天使長を造ってアダムとエバを造るとき、天使長であるルーシエルという存在を永遠の愛の標準のもとで造りましたか。ちょっと一時的な愛の標準として造りましたか」と質問するのです。そのとき、神様はどのように答えなければならないのでしょうか。「臨時に愛する標準のもとでお前を造った」と言うのでしょうか。言うまでもなく「永遠を中心として造った」と言うのです。そうするとサタンが「私は変わったとしても、あなたは変わることができないのではないですか」

たとえば、神様が「そうだ」と言うのです。「私が変わって破壊的行動をしたとしても、あなたは破壊されてはいけないのではないですか」と言えば、「そうだ」と言うのです。たった一つ、これをつかんでいるというのです。

(同 p.89、第二章 罪、人間墮落の内的意味)

子女達を奪われ、傷ついた神様に、サタンはこのようにして神様の愛を試しました。どれほど神様が苦しみ、悲しまれたのでしょうか。

それでも、神様は、永遠に愛すると誓ったその創造原理を守り、子女達と、そしてサタンまでも赦し、復帰するという道を歩んで来られたのです。

そんな神様の心情を理解した私達は、サタンから来る悪の思いに、もうこれ以上主管されるわけにはいきません。絶対に悪の心を自分から切り離し分別できる「神の子女」となっていきましょう。

悪の心に打ち勝つポイント

それでは、悪の心に打ち勝つポイントをお伝えしたいと思います。4つのポイントがあります。

一つ目は、「神様と同じ立場で見つめること」です。自分が愛せない人でも、神様は必ずその人を愛しています。自分の目ではなく、「神様はこの人をどのように見ているだろう」と、神様と同じ立場に立って見つめていく努力をしましょう。

二つ目は、「自分の責任から逃げないこと」です。自己中心の世界には責任がありません。責任から逃げようとしません。だから、どんなに小さな役割でも責任から決して逃げず、ぜひ自分から責任を持って成し遂げていく努力をしていきましょう。

三つ目は、「神側の中心に従うこと」です。親や先生、教会では成和部長などの、自分を正しく指導してくれる存在は、時には自分にとって耳の痛いことを言ってくる存在かもしれません。しかし、それは「本当は自分でも分かっているやらなくちゃいけないこと」だと思います。そんな神側の中心を信じ、従っていく努力をしていきましょう。

四つ目は、「良い行いを広げること」です。サタンは、悪の心と行いを広げてきました。誰かと一緒に誰かの悪口を言い合うと、その人とは手っ取り早く仲良くなった感じがします。しかし、「自分も悪口を言われるかも」という不安や恐怖の中で生活することになります。反対に、人を尊敬し、褒める言葉を言い、良い行いを率先して行うことで、善を広げる努力をしていきましょう。

この4つをよく意識して、悪の心に生活の中で打ち勝っていきましょう。

真の自分を探す

「罪を憎んで人を憎まず」という言葉があります。どんなに憎らしい人がいても、その人

そのものを否定したり憎んだりしてはいけません。その人の悪い行いを注意し正すようにして、その人自身は許していく、そういう見方をしていくことが大切です。

どんな人間の中にも必ず良心があり、皆が神様の愛する神の子女達だからです。

自己中心の思いによって苦しくなる時、湧いてきた自己中心の思いの、さらに向こう側の心の奥底を見つめてみてください。必ずそこに、小さく光る「相手を許したい、愛したい、一つになりたい」という心があるはずです。それが、私達の本心であり、本当のあなたの姿です。

最後にみ言を訓読して説教を終わります。

未来に向かって、きょうの成功よりも明日の成功のために耐えることのできる人々が善なる人なのです。そのような人々が指導者になれば、善なる指導者になり、明日のために建設する人になるのです。未開地のような環境を開拓して、発展的環境として残すことができる人です。ですから、いつでも自分を中心として生きる人々は悪に近い人であり、公的な神様の思想を中心として生きる人々は善に近い人なのです。

(『真なる子女の道』 p.67)

きょうは、「サタンと罪をよく知ろう」という題目で、お話ししました。

以上で説教を終わります。ありがとうございました。